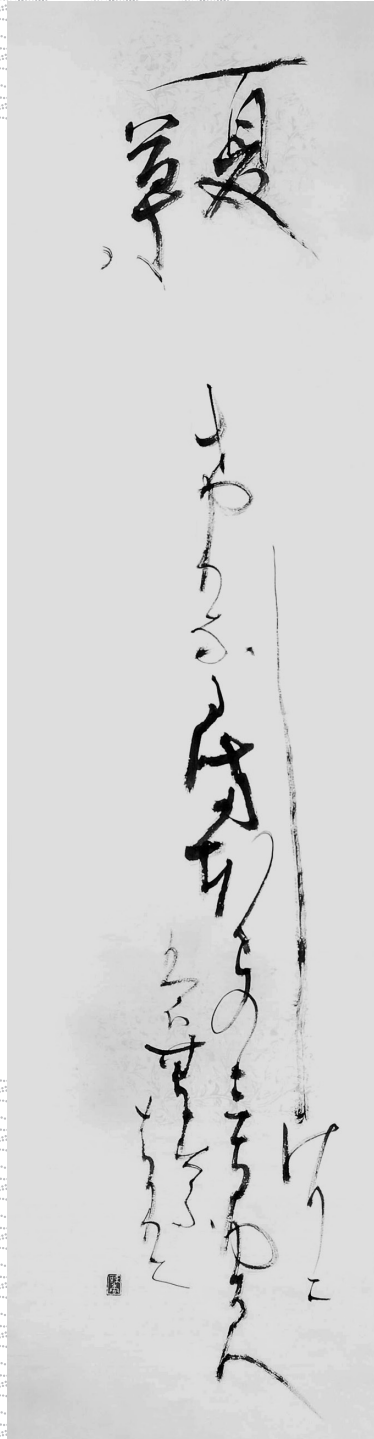


清風書選

小林和香先生書



星野煌雪先生書



晨露夕陰 (鮑照) 朝の露、夕べの木かげ。

夏草は茂けにけりなたまほこの
道ゆき人も結ぶばかりに
(新古今和歌集 藤原元真)

第65回 書道同文展

会期 六月二十一日～二十六日
会場 上野 東京都美術館

書道同文会第六十五回展の開幕！
そして、何と書道会会長鈴木静村先生が同文会会長をご勇退。思い起こせば、平成十三年第五十三回展の折「会長」にご就任。「同文会の歴史ある伝統を遵守しつつ書の本質の開拓を。現代的な新しさを工夫研究し、新鮮味を導入していきたい！」等、希望されてのご出発でした。そして、そのご希望が脈々と受け継がれて今回展を迎えたことでした。

仰ぎ見る程の大作から始まり、さまざまな大きさの作品が、その内容（漢字、仮名、漢字かな交じり、臨書）等も加味してバランスよく陳列され、心豊かな感動の中でゆったりと観ることができ



ました。
特筆すべきことは、会員による「特別展」でした。こ



とし始めて導入され、街の画廊を想わせるような一室。心打つことばの競演とも云える作品の数々でした。
書道誌で学び同文会を発表の場とすることをモットーに、ここまでやってきました私達。ことし書道会の主幹高橋香樹先生は、同文会で参与となられて二回目のご出品。そのご社中からも何名かのご出品がありました。
こうして今回展を成功に導いた役員の方々はじめ沢山の皆様のたいなるご奮闘の力をひしひしと身にしみて感じているところです。
今後の更なる同文会の隆盛に書道会の皆様の力が大きく結集されることを念じ、毎日々々を大切に励んでまいりましょう。
(北沢博舟)

半紙課題(予告) (十月二十二日締切)

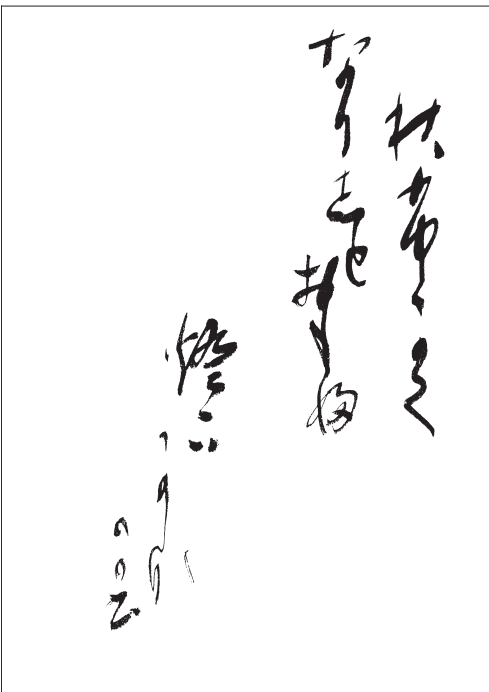


平岡華雪先生書 詩情秋水遠し(沈周)

訳：詩情は秋の水と共に幽遠である。

平岡華雪先生書

秋ふかくなりしとおもふ燈下かな(もと女)



A 鈴木静村書

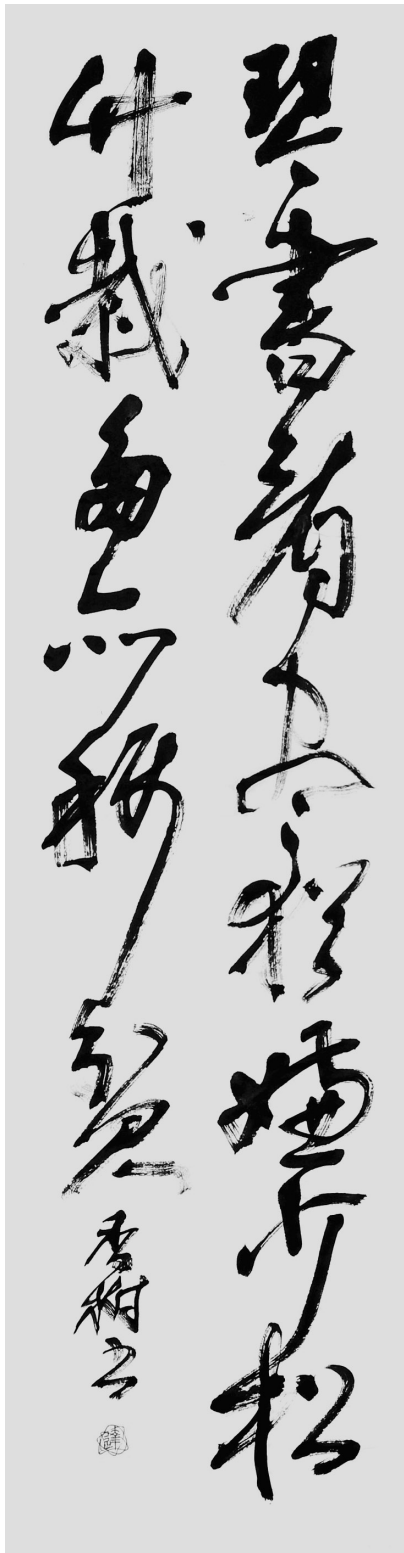
琴書看盡猶嫌少 松竹裁多亦稱貧 (張司業)
琴書看尽して猶少なきを嫌い、松竹裁える多きも亦貧と称す。



B

高橋香樹主幹書

行草体の単体構成。一行目の墨継ぎ(嫌)が不明確のためか、次字への流れが悪い感。連綿はないが、気持ちのつながり(筆脈)を大切にしたい。琴、令の払いに伸びを。書、三画目からタテ画へ。看、左払い強く。盡、草書のポビュラー体として覚える。猶、偏の用筆に留意。私は嫌で墨継ぎ。少、鋒先で細く強く。竹裁多、渴筆部分。潤いの出墨も。亦、私は墨継ぎ。稱、字幅を。貧、頭部大きく。



筆は加料四号中鋒を使用。一行目画数が多い文字が並ぶ為草書を多用。墨継ぎ(嫌・多)以外は全て連綿とした。連綿線はなるべく短くなるように工夫。収筆は中央に近いところで終え、起筆はやはり、中央に近いところから始めることにより連綿線を短くすることができま。

訳：琴を弾じ書を読むことは何度してもなお不足を感じ、松や竹はどれ程裁えてもまた貧弱に思うのである。

予告 (十月二十二日締切)

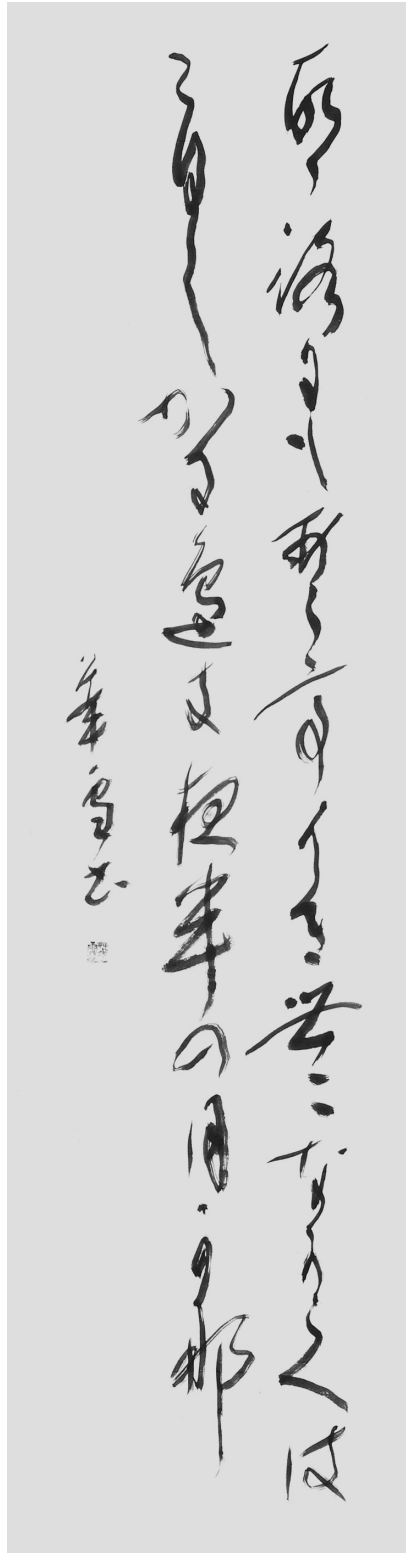
葉上秋光白露寒 (羊士諤)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

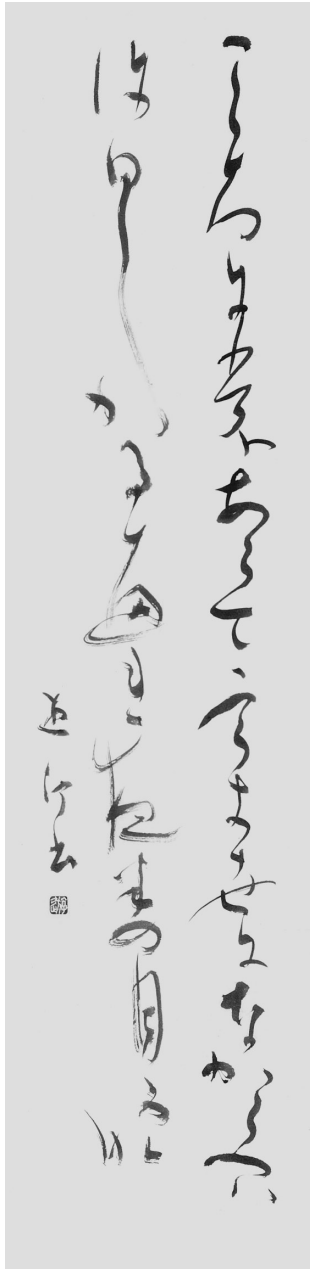
心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな(小倉百人一首 三条院)
故、路尔もあら亭うき世二な可らへはこ日しかる邊支夜半の月可那



B

立川遊汀先生書

ころる尔裳あらて宇支世尔なからへ八許日しかる遍き夜半の月可那



三条院は三条天皇のこと。権力闘争や目の病気で絶望的な状況の中、今眺めている夜ふけの美しい月は、きっとあとでなつかしく恋しく思い出されることであろうと詠んだ。

学び方

書表現は、各人各様さまざまだが、あまり凝ったものより自然体がいい。表面の変化を強調した華やかな作品よりも、地味だが内容の充実した作品、特に線質の充実した作品にひかれる。立派な作品を作るとか、物事の体裁を考えるのではなく、胸の奥からほとばしる魂の叫びのようなものを作品にできたらと思っている。

●参考 あたりまえの書

書はあたり前と見えるのがよいと思う。無理と無駄とのないのがいいと思う。力が内にこもっていて騒がないのがいいと思う。悪筆は大抵余計な努力をしている。そんなに力を入れないでいいのにむやみにはねたり、伸ばしたり、ぐるぐる面倒なことをしたりする。：以下略

昭和14年「書について」(高村光太郎『書の深淵』北川太一著)

予告(十月二十二日締切)

花におく露にやどりし影よりも枯野の月はあはれなりけり(山家集)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

戸張丘邨先生書

樹影覺秋來(章孝標)
樹影秋の來たるを覺ゆ

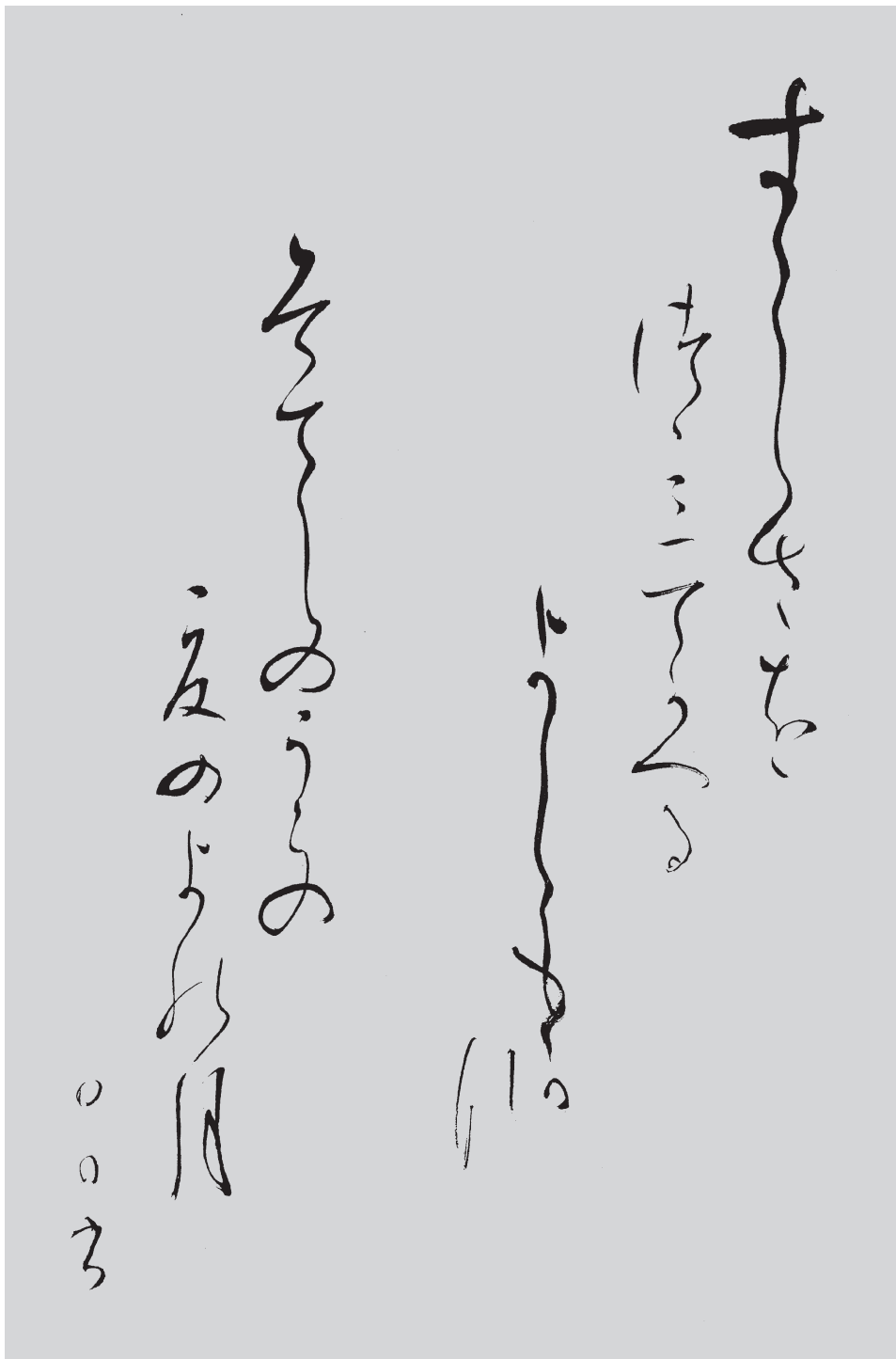


訳：樹影にも秋の来たことが感じられる。

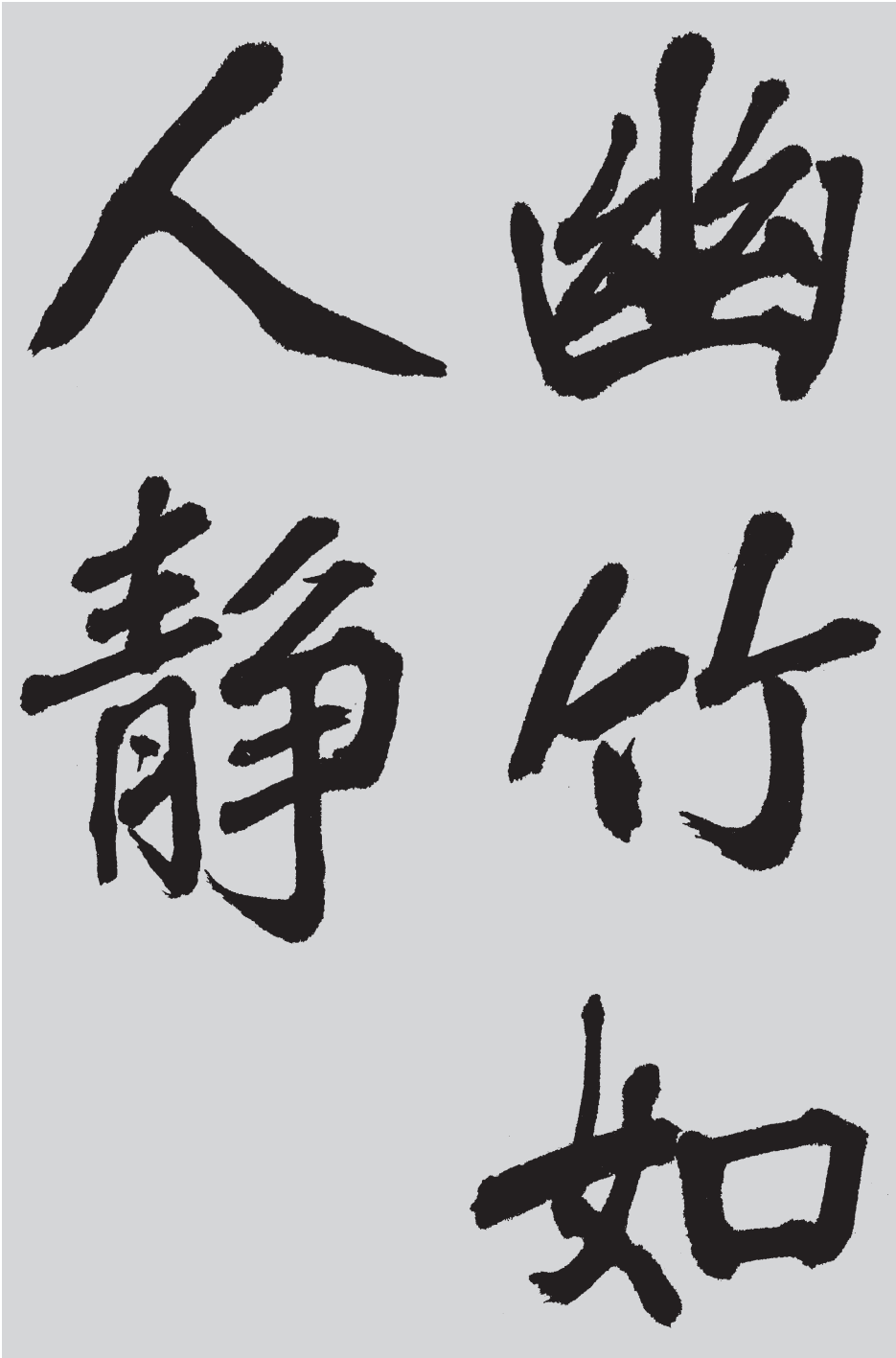
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高塚竹堂先生書

涼しきをつつみてかへるよしもがな袖師の浦の夏の夜の月(本居宣長)
す、しさを徒、三て可へるよしも可那そてしのうらの夏のよ能月



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



平岡華雪先生書

幽竹人の如く静かに(黎簡)

訳：幽境にある竹は人のようにものしずかである。

〈組み合わせがポイント〉

「女」字について

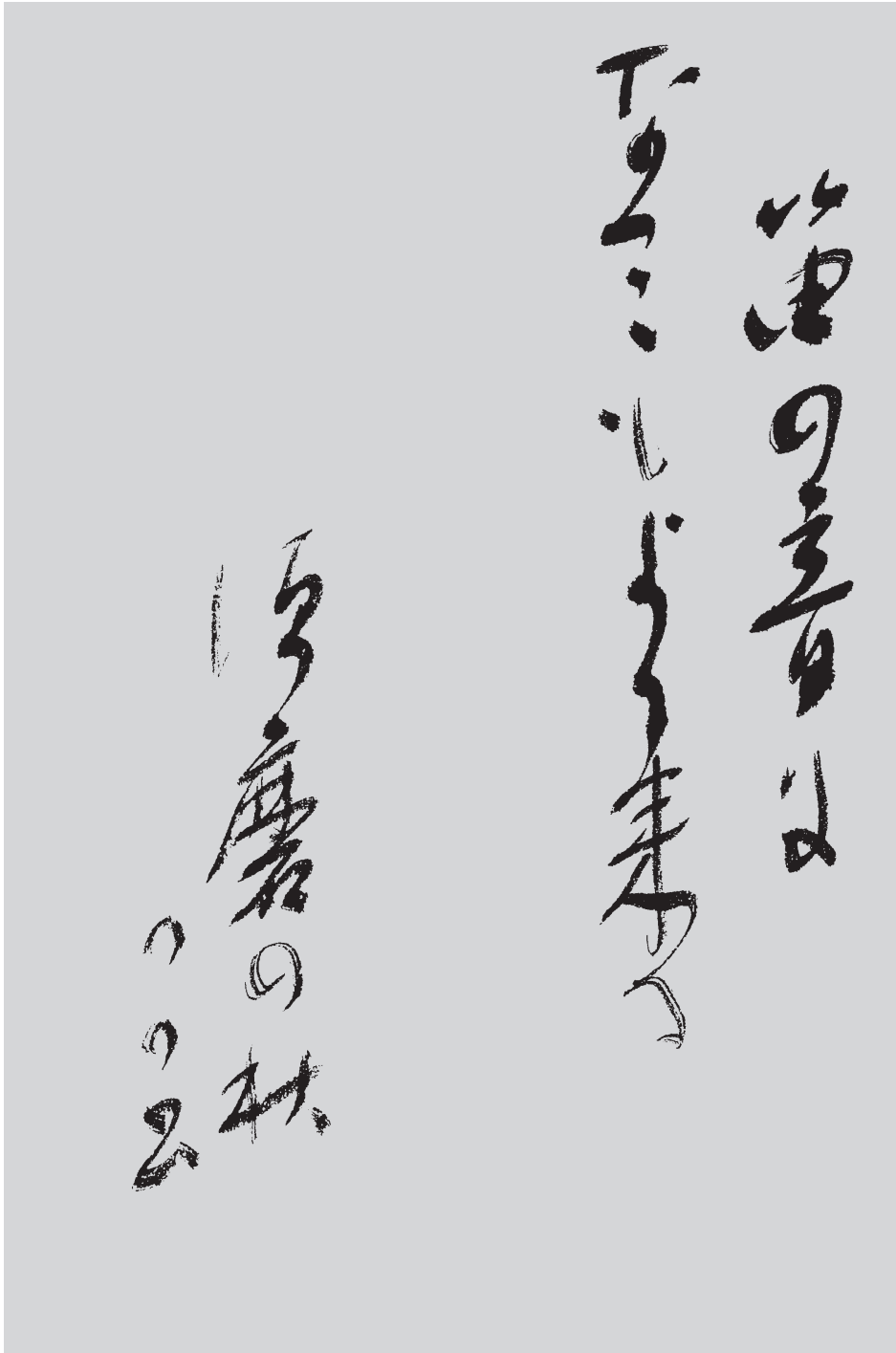
「女」こそ、ポイント!!

楷書でこの字がついてできている字を書くのは、少々以上にむずかしい。第一は一画目の二曲、次に二画目の斜線、中の窓は狭く。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

笛の音に波もより来る須磨の秋（蕪村）
笛の音^に波^もより来る^{須磨}の秋

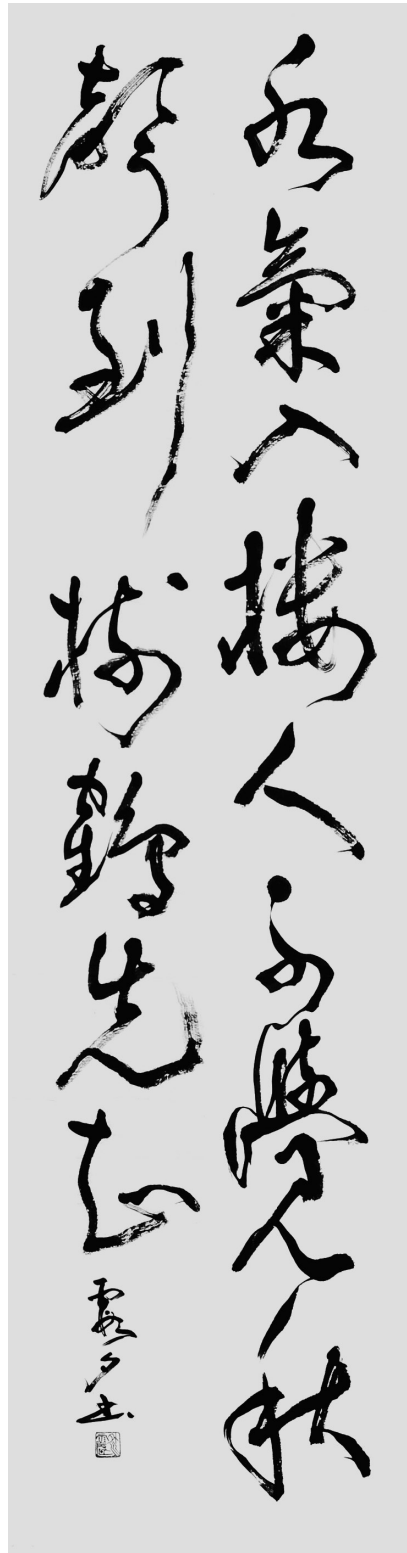


〈表出の決め手〉
三行二群というポピュラーな散らしですが、左群は漢字が主体（落款を含め）。しかも「須」で墨継ぎをすると、平板になりやすい。「磨」の大きな字形をアクセントとして打ち出すことも一法。落款を含めての左群の表出が決め手となります。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

外川霞夕先生書

水氣入樓人不覺 秋聲到樹鶴先知 (王達)
水氣樓に入り人覺えず、秋声樹に到り鶴先ず知る。



訳：水気は楼に侵してくるが人はその事を感じぬ。秋の声が木におとずれては誰よりも先に鶴が感ずる。

内田和香先生書

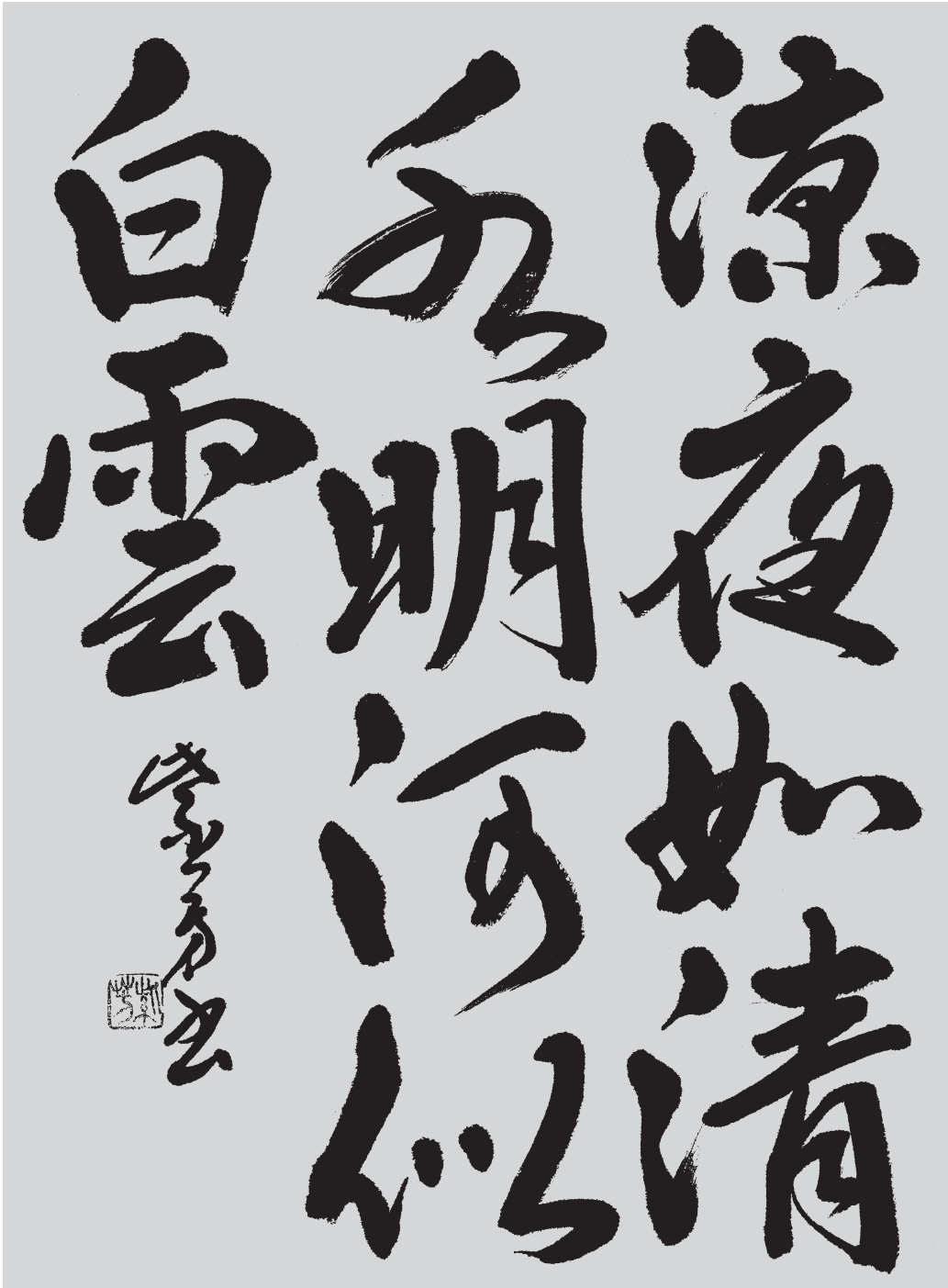
おほ空の月の光しあかければまきのいたども秋はさされず (後拾遺和歌集 源為善)
おほ空の月能光し阿か希れ者満き乃い多とも秋八さ、れ寸



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高橋紫芳先生書

涼夜如清水 明河似白雲（徐致中）
涼夜清水の如く、明河白雲に似たり。

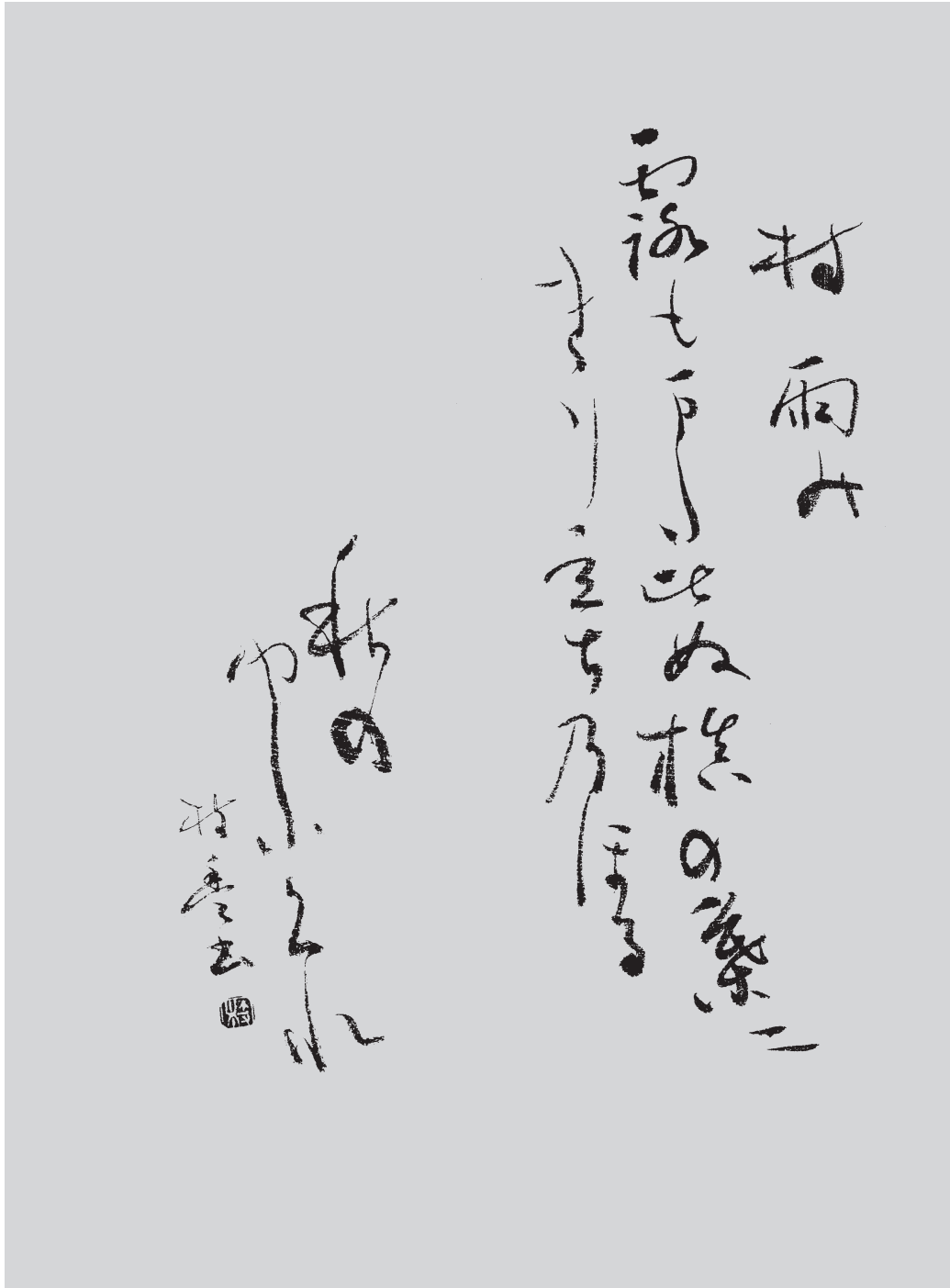


訳：夜間は涼しくて清水の如くに感じ、天の川は大空に白く流れて白雲かとも思われる。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

鈴木枝豊先生書

むらさめの露もまだひぬ真木の葉に霧たちのぼる秋の夕暮（新古今和歌集 寂蓮）
村雨能露も万多比ぬ楨の葉二きり立ち乃ほる秋のゆふくれ



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

石原春香先生書

路川千曄先生書

課題2 (初段階以下)

課題1 (初段階以上)

月は皓々とかがやっていた。少年の目には
 昼の太陽の光よりも、その夜の月の
 光の方があざやかに思えた。

土くれのすきまで鳴くコオロギや、
 薄茶色の雑草に身を寄せるササキ
 たちは、このときとばかりに冴えた
 空気の中で美声を震わせる。

課題1 (初段階以上)

土くれのすきまで鳴くコオロギや、薄茶色の雑草に身を寄せるササキたちは、このときとばかりに冴えた空気の中で美声を震わせる。

「里山の少年」今泉光彦

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四二〇円

課題2 (初段階以下)

月は皓々とかがやっていた。少年の目には昼の太陽の光よりも、その夜の月の光の方があざやかに思えた。

「宙ぶらん」伊集院 静